

## 「俳句で綴る泣き笑い介護日記」

(2020)

2001年父の米寿を家族一同で賑やかに祝い、父も嬉しそうに「冗談を飛ばしていたのだが、その年の夏、突然父の半身が動かなくなつたすぐ救急車を手配、隣町の大病院に運ばれた脳梗塞だつた。その後98才で亡くなる迄の長い10年間・・親子孫達の泣き笑いの介護の日記である。

銀行に奉職する」と五十年、風邪をひいても、まして病気入院などで休みを取ることも無く、支店長生活が長かつたが、どんなにか苦労・ストレスが多かつた事か、同じ会社員である私には良く分かる。背筋を伸ばし・大股で・早足で歩く父の姿は近所でも銀行でも評判にもなつた人だ。まさに生真面目一筋の典型的な銀行マン。昨年冬、満100歳の母も老衰で亡くなつた。



父倒れる」

炎天を父乗せ喘ぐ救急車  
家がいい 父訴える夏あえヘッド  
走り梅雨 リハビリ拒む父の意思  
病院へ行く父選ぶ夏帽子

「父狂う」

暑き日の 真顔の父の夢語り  
寒き夜の 父の幻覚母が聞く  
秋天や父の左脳に何有らん  
決算だ 父の幻覚春深し

「父の病床」

父の三味 立てて年越す古座敷  
夏病床 父の陰茎九十年  
春は夏 父あざやかに放屁せり  
検診日父の大声 今日も無事

風呂「

初湯して父に真白きオムツする  
父の風呂 今日も無事なりちろろ鳴く  
父の尻洗いて母の年終わる

菖蒲湯で父に良き日の話する

年の暮れ・新年」

父の予定 全て書き入れ年用意  
老夫婦 病めど淑氣の初日かな  
一年無事 父に替わりて賀状書く  
九十五の父にも新年社内報





伝の父」

煩惱を捨て去り 父の春の顔  
豆を撒く 笑顔の父や二度わらし  
一徹の父の視線や今朝の秋  
時折の父の正論冬温し

想い出せ「

上海リル 父に歌わせ春を待つ  
終戦忌 写真の父は馬上なり  
酒飲まず 父九十年の青嵐  
夏の鏡 昔の父は映らぬや

食卓の父」

嫁の作る父の好物 鮓の汁たい

病みてなお匂い確かや栗ご飯

鯛大根せせる確かに父の箸

身につきし父のエプロン鮓を食う

「父の書斎」

出所不明の父の株券　日に曝す  
書斎冷え　父のパソコン時止まる  
書架冷えて　父の手垢の銀行史  
文箱の父の律儀さ春浅し



「父歩く」

父歩む桃源郷や　春深し  
木の芽風　白寿に迫り父歩む  
風花や　ふらつく父の腕強し  
病み惚けし父といのちの日向ぼこ

「父の庭」

庭椅子に父座らせば秋高し  
花満ちて父の優しき面輪かな  
十日菊　父の律儀さそのままに  
麗らかや　父は帽子を深くする

枇杷「

老父母の 自慢の枇杷を孫がもぐ  
枇杷の種 吹き飛ばす父まだ若き  
もぎ立ての枇杷 龍に盛り父にやる  
大粒の枇杷を選びて 御裾分け

父と母「

大輪の菊の勲章ちちははに  
ちちははの命を搖する虎落箇もがりふえ

偕老の父母生きている二月尽ふ ぱ

木枯らしに父母の余生の吹き搖れる

「ふるさと」

父母老いて つちふる里になりにけり  
里の雪 遠き日の事見えてきし  
夕紅葉 光る辺りの父の家  
ふるさとの凍て星の下父守る

花の宴」

花予報 老父母招く佳き日なれ  
老父母を招く佳き日の花日和  
ちちははの佳きまほろばや花吹雪

花の宴 父中座して大臣寝

父を見る母「

父を見る母の余生や豆の飯  
腰屈め卒寿の母は路を刈る  
老いてなお母の豆飯父生かす  
幸薄き母のしわぶき九十年



親・子・孫」

ジイとバアへ 娘の土産愛のチヨコ

福寿草飾りて集う親子孫

親子孫 優しきつから豆の花

春霞 我が家の阿修羅父守る

父の旅立ち

秋日差すベッドの父の薄目にも  
雪の影 酸素吸いつ父眠る

如月の音無き雨に父遊けり  
花満ちる父の棺の用じられて

父の影

秋入日 書齋に父の後ろ影  
亡き父の文箱開ければ秋の風  
父遊けり 花摘む野辺に口遊び  
父歩む 淨土の道の利休梅